源氏二十巻抄

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

源氏物語抄巻第四

目録

もみちの賀

花乃えん

あふひ

857-118
帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118
ガラス使用

紅葉賀

紅葉の賀と別てきこゆる詞巻中になし試楽の日紅く
しくれたる空乃日やかすくしくしうらんとあり先
此巻の奥に紅葉乃賀と書り故の裏書にも出たり
もそれ付たる名成べし　算の賀　寛の賀　紅葉賀と
昔例本朝之賀乃始ハ淳和天皇天長二年十一月に嵯峨太
上天皇五八之御齢云〻四十年を五八と云五八四十也
此賀されたるとしもみえしを四十賀とてもみえし今千年
の齢をも祝し也山海珍味を以て酒宴音楽なと白と云〻
興福寺なとにて法事をあり又五十賀は五十も又十を何
までも用ゐし　略之別抄書之　源氏十七才十月より

十八歳七月まて九事あるへし

朱雀院の行幸　宇多法門院に御かまつりけるや朱雀　三条
朱雀ふるき朱雀院泉院のつれをおもへぬの法門乃おもしろく海
東院とのへり　承平ノ法門と朱雀と申してまつる法一
人とさそり　古今集に女郎花合せ宇多法門乃時御しし

行幸　幸一字とこゆともよめり天子乃法座ある所に
幸あるを云なり
御幸ハ法皇院也り　啓ハ東宮中宮にまうすなるへし

試楽　かまへまく　禁中ゆへて也

青海波　唐楽也　清和の御代より始まれり

輪臺（リンダイ）　楽乃名也　青海波ハ序也何も舞あり

花乃かとりてハ太山木也　うつりの歌九は云
東乃かとりけり乃ニ山木九都つれみし行ふと云と
太山木も面白しあはれ
思いなと　舞のうちに縁（エイキン）比乃事なり
法のれうひん　仏乃と説ける言葉也

聖主天中天迦陵頻伽　法華経
或迦陵（カイゴ）声勝衆鳥（スグレタリシュテウニ）　分名鳥異名（ハイーミヤウ）也
天上のよりも佛世界のを勝ると又一てきのにうり
得とうたる　迦（ダウカ）なのまも青海波の後にあるへし
古を唐　右ハあかの楽也
楽人の母法　西海

神なや　大鏡云　いみしく侍し事そやかて　円融院の
大井河行幸に富小路乃御息所(ミヤスドコロ)の御腹の親王惟明のせ
ちまそ辞まうしせ給へてしはへりけるこそみなく侍り
しの万人まて　されぬ人を侍らさりきはのくちのひ
のるやうりうつくしくわくらせ給ひしのちに山神め
てくとりまゐらせきは嘆(ニ)用　ゆくしかめくまてあまた
とも嵩山神見えへよゝれとあるむねそ此給也
神は嵩すれ　密通(ミツツウ)なりける乏し
又そやのく　波壷　云まつく上ろうまゝしまゝすなり
きしう　快と云字　此字むを　悪(キ)む也　けしうはあしくす
るれをよくといふむなり

家の子　其の家に生付たる人のむ也
あくまり　巨　王肴　大字と同むそりよきろ大やうなる所
御覧有擾樂の今春秋も御覧せとのお遠る所し
いつふ侍らんしきん　源の家へゆるの辞をいふと也
御打のふよ哥　云きや藤壷の侍ため兵ふ君一人むかに
入て謀しむを云給ひさやとよまと
めをあや　うつくしみむ其　後乃文の心也
みしのまれすや皆双地なる乏し
のり人乃哥　青海波(セイカイハ)を　唐の楽(ガク)なり
大将くみそと　大殿さまなれたかしめさぬとの詞也
のり人乃袖みつることをきまれなもたかしあかりし

るりなき大ぐんと云心なりや　河ね遠
御前なとしハ　唐の楽(ガク)高麗(コマ)楽さて〻御別殿なり后に成給
らん山はしられぬさと也　河朱雀院に成給ひしなり
みもときやう　山鳥見入てなとなりや
のかしろ　垣代地下雲上相交る也紫宸殿なとにとみゆへく
さんたあらむふとそとさそねれやまた拝せしたへし
らひ給へ里
宰相ね二人ハ　注ともなし
四十人のかしろ　為　此又四十人吹事なりとく
よろきらて可心得也
殺なとそて　殺透てなり

たた大ね　注ともなし
のきふれ紫　作枝ともあり　色々御庭前也
延喜のとの例　河の姿
へあや　偃(ヒヨリ)形云　兼己二むら山をあみんいふともあや也
拝やそふはまさ所と　顔(ヒン)照(ゼウ)注に云拝まで人所やとて
定りえてつ色をかすまと也　拝にえ之取(トスヰ)綾(ヨツ)故に云
入綾ト　河
そよきやうてん　注せなし御子を桐壺帝此御子なり
承香殿　それともなし
秋風楽　盤(バン)渉(シキ)調(デウ)也
しとさ海し

正三位　従より上りて成給へり
延喜御記云　貞観以来奏賀時立二叙位例一
正下正四位下の　加階也
むかしの世　前世也
文を　御懐妊故退出するや
さとがのれ
かろくの　まされるあひしを不云也
まつれ人乃やうに　匿怨而友其人左丘明恥之丘亦恥之
人らされ　若上は一見給ひて其御心れさしくおぼ
ゆへ　きはれたるおもくみえたくひなしとなり
見けい　こたへもあへりまくる也

御あらそひも　琴も下心ある含めり
はのなる　我もとめても与所なる至しなとらひきさるる様
みとなり
まん所けいし　政所家司
あやしき稚りし　幼稚なるをいふなり
ののほゝる　祖母の御訪成し
けさやうかに　源をとか擬せされするなり
この君　源也
母みこ　共を源氏の母乃方に成てをさなり
弱り　弱に源をみんとをおほさて源をめしてみる
やゝもや　母まくれ心所にて侍てのそきまり

さらく　源氏の詞也
ことそと　一かたなくてすくす也
すくく　健日
りうえ子はぎみせゝて　双地とんびて丞理よ丸
ゆめくみかこそ　紫上祖母遊去そ九月廿日ゆ九十日そ
十二月廿日ゆなるへし晦日ゝ除服とまそ日をとらへ
まや　哢　十二月可除丸　笵お
又おやもなくておひそ　御相　母無ふそくとくれく
うちやしなひそてましくまる男一のとしなり
まるゆきなまん　紅落葉をとれそさて海を由き父ともを
りつれをいふへ文するれを　紅梅　萌木ゆ狩袴をか梅襟

はと名あはきぬ彼のふつ文まや元紫女服とま紀らも
きら趣別ハ不用捆なをとも除服以後なりし用捨まして
きのくし給ふとる也
地のゝ文也　紋不見也
てうそい　十二月除服らく初まね　十八文の年なり
朝祥延喜五年　正德同十九年又行之清涼殿の東庭よ
四位五位むろむ上統を連て舞踏するや下略之　途中行幸に
奉為搾略するなが物祥と近代謂之
うくき　そくめくむや　あはりふ方ますゆし
かやらふとて　晦日ゝあり　なくふゆるのまゆをさとる
丸又晦日かやらふとてとりさらる丸　追儺　殿上

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

人御殿の方ニ立て桃乃弓葦ノ矢をもて射四ツ目鬼面ニ楯
桙持て又侲子とて廿人紺の布衣着たるものとも率て内裏
北四門を出る事也疫病氣也　鬼とは方相氏をいふ
鬼の名也　儺の一字を鬼やらいとよめり
金吾除夜追儺ニ名ヲ　三体詩
いぬき　犬君也
ひいなの　ひゐなの中にも源氏と名付てもてなしぬきには乃
東内ともいひて又内へ参りせ給ふてはいとめさましく也
御とのへと　双紙おとなしく成給ふよしとなり
うるはしき　外様のさし気詞也
さかしく見えぬ　つれなきまゝと源氏をゑしぬ詞にておはみる

速猶給はずと又つれへおやと思しめさるゝ也　よそ
くしとさむなる也
よとせ　葵上は源より四ッ姉なり
おもしたる　営式は評也　ねとこのみ盛へし是も同意
おもきさ給ひ　うちの猫の云　世中にみなたかくつ
たりける御おひわまたの中にまじと猫を見と左
出させ給ひて大将にも其頭目に評釈などあらんとも
乃をもしれらとて給ふ
今案前名あ方等より　懐家　欹礬　西天竺名猫に
やみ紫の名猫也へし　かくさて帯まさるすとかなり
内宴　正二三月中に清涼殿にて文人をあつめて詩を作

譲位ありし事あり主上并執柄表袍をも保元ゟ
信西ゟ行て断絶なり
きんさ　禁庭　南殿の前庭也
内　桐坊門　春宮ハ　朱雀院　一院ハ　寛平
先帝をましまさぬところ也如何
あのほとしれたてまつる　御産乃事なり
源宰相ハ卯月ほ門のなかを三月ゟかはるなるへし
つれなくて　正月は人包ぬ　二月十日ころとあるを
女のいとうれ　後撰　伊勢　我とものいふへきさん人もれ
とかくて女乃いとうへり成ぬ理なられ
中ゐの衣　養つしほひしすなり

世中乃　我れほむかるなへし
うきけふ　咒咀（シュソ）
ほかやい　氣の清濁ほふむや
うつしとり　源ゟ似たまふとなり
ほむ乃それ　力まさつあまさや　わつためにうやき氣
女乃ほくりうれのつをむ乃鬼もみしそり
いのさ命ふか　子故又演あり中となり
京のほもわしみなれそ　源とさとなしを思召とあるを
あうくしそてもなのされらんのむなるへし
見てもわかみか　ほ子も我もみても欲給ふへき　源をみぬ
と欲給ふと也　命婦か　人此親乃ものをやうふ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あくるゆふひ　藤と源との中乃ことなり
人の猶つゝみつゝ　藤乃御心中也
命婦とても　藤の御つゝひ折もあはれなり
思ひのかゝる所　命の心中　双方へ書なり
如月より　藤入内　冷泉院もうまる
なやましさまとちハ　源と冷泉とや
他人も勝まさりて　日容貌(ヨウハウ)のにほひや
みこたち　足下(リコ)とハ源より対して勅云也
おもての父　此藤の白詞とする
うつろふむちしを　くくふむのかなくなり
猶こそ見　恐気の体也

似るとおほしめすと　あはうら双地也
身の添りし　二条院にて源ほそ産まくなり
よそへつゝ哥　源は思を文によみてなくさめとなる也
新古今　よそへつゝみれと露にかなくさますいかに
かすへきなてしこの花　恵子女王
花よ何のすん　我宿に咲し撫子(ナデシコ)いかにしけりと哀なり
さのみすんよそへてもみん
袖露はかり　床夏(トコナツ)に縁(エン)の詞也　ちりをとふすへし
とそ思ふ　咲しうら妹と身のめる床夏也
ちりはかりそそとつかと云心なるへし
袖ぬるゝ哥　うとまれぬも平也　にかのてまとそりまて可

むね　なみにきこえわたらぬ
うちゆく〳〵　ひんのかんほうとよめる所なり
あされたる　大袿（ウチキ）のやうにて直衣ともいふ語をねたりや
うちきそえおもしれ下に着る袍也　嘩
ありける　堂上の所也　撫子（ナデシコ）なる色し
なつかしけなる　源氏のもやく入語をねとなり
はれたるたり　源也
ひめる琴乃　盛みてそへぬる琴の音きれやみらくもく
なくこふらくのたえき
見るめにあはん　まさる気をこころきと云ふ所へし
ほうのことハ中のかうを

箏ハ秦声也世謂（イハユル）蒙恬（モウテン）為（ツクル）之（ヲ）弦有十三象（カタドル）十二月其一ハ以象閏
也自一至六大弦云（ト）自七至十中弦云（ト）自斗為（トイ）巾中をくか
ぞへてと云中のかうをハ中也　平調の時ハ二七ハ宮
なく中乃をハ下無調にしらふるとぞ　花
一れをとるを第一おかしきと云一かしきをせまりてたけ
道はいときまさりく中の第一かうきといふむよや細絃（ホソヲ）
よりおかしきむ也中乃あのゝことひへ伊類ありや
平調にをしくたして箏柱（コトヂ）をさきそてたけるや　此後嘩委
ゆしたれまて及てをきこし残ハ人王
ゆしあんする　ほんをゆるきとなり
かそろくきりそ　笛乃曲也や獨壹越調（イチコツテウ）乃楽也非平調

又玄妙なる調子をとゝのふる調子を又くのをとむる也
可弦抄 長保楽 大太采破保曽呂倶世利加利夜須次也
も輪台のむなしき也
一日也 詩云一日も不見如三月
く狭くしき
おもの 涼膳なり
あやうけに 源又出給ふんのしとなる也
まつりし 源をとゝめけるとするを可弦人よくそあるし
しとなり
あくるなけに をさなしきむ心をなる也
猶未なかりき 源幼稚乃時懇にましし故に別ある所へ也

猶なと涼門乃給ふ也
ふまれを よそもあまたなり
う孫め 女荒人 うねめより荒人そう人なまとも如此
書たり 荒委 今も荒人とて内裏に祗候を荒人あり
との女也 嚀
内侍のすけ 王孫也此一人乃事 猶禮中ノ相云なり
すけとも出ていふを 内侍のすけ此事なる也
のと すけ せうあり
此当つりくし 涼けつゝる役を 内侍る所へし
みうちきの人 うちきをおりけて祗候して此髻とる役し
君々りやめて内侍を誤あそするをし 又奥よりの

首尾(シユビ)を上の法装束(シヤウソク)めされても可然也

かはほり 蝙蝠(カハホリ)を見て扇を始むる今の末ひろかりや

女の扇をはつりも指事ハ顔(カホ)をかくさん用る為なへし

夏をうちかすめるにしたひて絵書(エカキ)る秋月のあふきとも

用也同後扇まつのくし文となり

まりのした 同はや めのみる乃落入(チル)事その心老ても

いかゝ老人目の伎黒成(カハクダル)構(ノ)りや

ぬるかくし ていまてぬるかくしてるなり

もつれ 扇のもつれや

うらかきまくハ まてとてかきと用て六のしくみる

かさつる とみとるをと切ててそをみて嘔吐可然と云り

同心集 元敏二九ふ見抄ー品伍可信源氏好說

もりの下草 大あらきの森の下草老ぬれは駒もすさめ

すかる人もなし

内侍かまく書たるは 心は老ぬれは人も心もとめぬと云

むりや 源氏後せあるを含てなり

もりこそ夏の 源氏なく残りたる也大あらきの杜

こと夜乃陰をたのむなれ

永正十五年說 内侍あまた人をのよするむつりや 苅(カル)

人もなしとあるをさも恩なく人の捕りふをとる也

君しこハ我 我門乃一ちり落のまかせんとのたまれ

の駒もこぬ事と杜乃下草と哉平合をかり

国立国会図書館 タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

篠まけさせ給　篠にさゝげまさめ菓のれの給なつくめ
河海抄下のえ　あ海の人なつくる肉鮨家ま臣人
やとのめんとよみし人ま
まうかふ　黒髪のしまろのこまし黒あふるまて海さい
とかるれりのそれもえん
擣たしう　津国乃なにはのはしれ擣りしらみりぬる
男にうれしのつけまゆ
ふくりうぬ　にくりうぬ人のまぜよろめんきぬを思ひ
うりあ人を今のりえなん
以中将　好文(カウニヨク)乃人まて肉鮨をゆのしくたりひてうくら
ひ付さるなり

あのおとゞ　好む
かきりあり　以上は源のそれのみとなり
うこての好や　蜜懐(ミツカイ)を双地也
温め殿　中の宮の東乃方にあり　肉鮨所まします所也
ねれうらめしう　源をかく思ひ入る時にる所へし
うりつくり　山城のあふ乃わたりの瓜つくりなよや
りしなやさ伊之(サイシ)なやりのふをんくるまやたれまし
うりたりまでは
催馬楽(サイハラ)　呂(リヨ)山城三段　りふさんくの用ようにや也
山城造りの思とも云て成やまれましとを我のおりひと
せんよりへ九泥のいやしきものて事に成てなりとも

思ひとなくさめんとうつる成へし　此比時分也　嘷
此くさう　文集　江州事　十七八乃わすらひをはらけ
ましてうらみ残すことはり可説也

白氏文集第十

夜聞歌者宿鄂州　鄂州ノ内ニワウム州あり
夜泊鸚鵡洲ニ　江秋月澄徹ナリ
鄰船ニ有歌者　發調堪愁絶
歌罷繼以泣　泣声通復咽
尋声見其人ヲ　有婦顔如雪
獨倚帆檣立　娉婷十七八
夜涙似真珠　双〻墮明月
借問誰家婦ソ　歌泣何悽切
一問一霑巾　低眉竟不説

あけ方成を　はつま成の海や此あまりの月さうくき哉
ふちぬまぬもかせしりの朽うきのひもかさしもわらちを
ころその方よりの吹く也とし乱しひてききを見れやん
陰中　催馬楽東屋律二段
吉めうかくい　内治前也　うさぬおく也　將乃字成へし
我のとも　源一人の胎までそわしけるなり
人はかもかす　かなやんつまれ末のうたひ抽乃詞なり
たよりある源理大丈也　ふとか許ひて也　けやとも
此成といくりあまりを庇すもるし
人をまてるのひ　むかひみるまていんきんも時宜もあり
恐弄　なともや

たゆめそ　源氏とあはれめく惟光をせめさせ給ふ也
惟光也なるを也し
まことのこと　大夫のこと也　まけあるらんかりや
くも乃ゆるまじ　わのせこのくへ文よひなりけくらか
のくも乃ゆるまじひのそて古歌しも
すりし　源氏とたらしたれとなり
こかく
ゆらうく　頭中をと内侍ひのへさるれ
けしく　けしんとるまて
あの本　撰者也
もしち　惟光乃年なん

ところ　嗚呼(ヲコ)あなつらうしく成也よや
うつしむ　現心(ウツシゴコロ)ぬしとのしく依給ふ成へしと英のこと也
けふむめるか　惟光清君かころひ乃あそくて浅(モレ)んとや
うしれとりきそ　名乃こ深の夜下まさんうへそりとり
きいたつらんかりも
のくれまくか　誰た生かしとのなへさるとうきさむ
とみことひへり　嘩
うらやさるまか　女人なりしうらやむへき事とする紀要
なかるを　なまもいふそうや　同
恨てもいふうひか　古のさ孫女人後給ひしとなり
太刀のむあふとふんともろにふかをよます

うきも　流ての後うられし涙河底をあらハふかきをぬ
と思へと
わつらはしき　殘をは　歌を恨んすなしまへく
咲をとふをみなと也ふをきる肉付の恨と讀ぬへき肉
作もはをとうらみまとまむ也
帯を　花よ委　装束の事ともいてするまゝ切りてする
すや此中下宮まれも源乃よりえこ紀とい人ゝ近代世
衣此帯ハ下りさ給の事を用禁色之人をハ蘇芳　両堂
裏濃打綾　蘇芳　長單文生　四位以下非参議
冬躑躅蘇二藍縠共　同とあみうふ織すゝ也　上下略
端袖　非為　端袖奥袖あ所也端袖わこちひろくを摘也

右衛掴理なけらゆへそりや
中さしを云肉付と此との中綿をのこさまんと帯をとの色
しまふとうき
石川のてまうとふおひとられそりよくぬするいの
る所おひろ花田れおもの中をさしする　但馬撃
東路乃みちれをくなる常陸帯のかとはかりもあきん
とそおもふ　うさく引合て成へし
惡うしかくの云　明や
そうしくさを　歌中中ぬの及成ゆへそりや奏文と
下衆と二ふおへし
うしや世中、本云未見よき掛上観しきる汁元

とをの山なる　此歌は此嵯峨の山なるにいさや川いさ
とあらくてうつりもしまか
いひむつふ御　内侍の事や　中さんとおほせる詞也
なんしとうれ　双紙成ゐし
さりさきこそ　去年而もとかく也なり
あの君ひとりそ　葵と紫と一腹也
うちさくてうんまて　双也
七月中宮より成給ゐる此十月
皇太后（クワウタイコウ）　后温子（ヲンシ）　照宣公女（セウセンコウノムスメ）　寛平九七廿六中宮
泰二七廿二光孝后　宇多母　寛平九七廿六
廿よ行んとよみ給人ゝ　いとゝ此たまふも　同

むのひのつま　冷泉也
御ありのうちも　中宮乃行啓（キヤウケイ）ありん鳳輦（ホウレン）にめさるゝ事
もあり　又庇糸毛（ヒサシイトゲノ）車にのり給ふ時もありし　供奉（クブ）の人
行粧（サウ）も信楽（テ）猶のきる也
伊勢物語に二条乃后此まゝ春宮の御息所と申ける
時氏神乃御　詣よ引給人ゝ　大原や小塩此山
御身もきぬす　心のみこく　公私の御事とかく
うくろそ　もくろき　殿上許とや
冷泉院そ　源の御子なるを
けふかのさ晦も　源はゆかりなりてそ仮やしうたとも如此
明さちよくあやしとあ　如日月也源也冷泉の御

雨夜の事なとあり

花宴　巻名　南殿桜ノ宴事也

此巻ハ紅葉賀巻次ノ年ノ春　源氏君十九才

花宴例ハ嵯峨天皇弘仁三年ニ神泉苑ニテ花宴アリ始之也南

殿花宴例ハ村上康保二三年ニ南殿ニ花宴あり也宴時探韻例

延喜十七年ノ延長四年二月ナト例度々ノ例ニ用之ス文ノ楽不

之例天暦時モ地下ノ詩人ハめしまく堂上乃殊なりつる也

南殿乃桜宴例花也しん也唐ノ杜甫　日本ニて探韻とし出

して花と云也　南殿　紫宸殿也　左近桜右近橘ノ紅乃

家中も寝殿の前に載之ノ事ともやさんとの用言

云く　貞観ニ指坂上ノ殿守なり勅守ニ立枝ニ盛と云と

度々焼失ノ後又移し載之也　代乃そ後法大寺左大臣ノ植

之作業なるとぞ見えけり大和にも作載とや
きのふきのふのなけり 延喜十七年三月六日於常寧殿花宴詩題
春暖囀林花 延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題
桜繁春日斜 延喜の御時清涼殿へわたらせ給ひて席を
しきさせ給ひしや
とうかた 南殿乃東西にまうけの座を東居れへ右坐へし
そのみち 詩作文あらそふ事也
たんゐん 韻字を一字づゝさぐりえて作也其作法を
先題と儒者の定て後かり古詩を一字づゝわけて探也
詩乃平仄或は時分にあひたる句を用庭上にして儒者此
文台の上にふせをきて申す也 なをもひきて主上の御
たまはる韻を二川字て東れ韻字にかられなんと一字宛用
まへまへの故実也 二川なりとても見せましまして詩を
案し給ふ又諸臣各一字を探用作者十人あまりさふらひ
言詩二句を一字宛く韻字のる也十四人乃時は七言乃
二句を用 花宴に委
宰相の中将春と云 韻字を探得て其を為ふ由とや申を
官姓名行の字を給はりたるとて名乗まて
於節花宴に源氏君の春乃字を探けしを給ふ事自然
宰やこえつかひ進退万事皆ほかひすへきる事也
其の人を皆別人をとも云也なり
をくしかりに 臆病の心や

けしきある　血乃盛る気を云又赤也
まそへ同しうたまして鼻あらはるゝと也
みすみえしとまれと　絶句一首なりともなり
よしおもひよるらんせ　功者則て慥もねや　何事も堪
などつゝむつる事のそしへしや
かくともそはゝむも　花宴なんは我計すて舞楽もなし
但天暦三年二月院花宴　陽成院　同十二日内裏
仁寿殿有之舞楽節春鶯囀又地下伶人計にて殿上乃
舞でうるゆゑやは猶但を面影あまたを如此書り
春の鶯　春鶯囀　花宴ハ使ある舞楽也　一名天長宝寿楽
とうのをとく河院ふかくりて此舞あるなり　囀

春宮　源氏へかさしと所たまはる也
乞しきけり　源経任とも不云
たのれとて　を此春上へ歩を思侍也
いかさましすまして　以中を翻久しくはる也
めけらしきしふ　柳花苑今世相絶了や
我宴なとの舞楽殿上の舞勅録と揃めつらしき事となり
源氏は舞のはとかくてふかくとく也　源氏の君乃をハえかう
きぬとや　結びと桂緑の河庭上にてさうる文意をと侍る
たてゝ文人も階下にてしみて蹊頌するなり
大うしには　源氏は楽勝するふうりて夜のむくうしかく
まふ大がさなうを源乃上をも気色へくおもひしとよう

や古今引哥にて理明也　春ならぬ心は花なり　孟初て
風情くしに揺ぬひそはく　心を置に二心あるひを
へだてと置とる方也
ほむれうるなり　此哥の人に絶給す事なる様也
本哥めしに　余情なしと云心るや
ほそ殿　廊此字をよめり
さんのくち　弘徽殿(コツキデン)　南より北へ通る廊あり奥に三
の戸あるところや　弘徽殿の東がはに渡廊あるそれ
細殿とも云西のほそ殿へ出る所をその三あり東方三
にあるところくにてさしたる戸也　呼
北の廊　登花殿(トウクワデン)へ通(カヨフ)廊や

のやうらに　こよひを思ひ出くなり
おぼろ月夜にしく　照もせず曇もはてぬ春の夜此朧月夜
にしくものぞなき　大江千里哥也
こきでんへまいる細殿の　是はこ人々の宮なし
うちとのひたる詞にてあしきやうなる字也
姫の夫夜の哥　心を付て可見覆月をゆく泉哉こまで不
みえり月の名残入ぬるふれりひふきさはくまで
廿日比の月と思ふ也
下旬を契られたりくなしぬと云心るや
ますハ　此句嘆女への料簡(レウケン)や
きんてう　おてうと読也し

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

さもあらぬ　不堪　不用也
中くうれ　宮をあまたを中く思ひたまへん間からの
文段中ニおのなりむ心ひめて可読也
文義中りく世をれぬ人くいりをとまやさやうの時を
中くハ浪定むろう詞や世なまさろの勝たれと可心得
又爲を世ぞ思ぬとれやし付てなり
宴　勝月段州春宮へや
さしるんとを　めもいやふとをなりをしとるを
おくまりくらきや　堂上の事と思ふへき
後宴　撰別を男踏歌の後二三月に有る後宴あり但花宴は
後宴にはなしとみ然也

うのゝ明　花宴は拍子にた大臣の女たちの兼給ひしもの
後涼殿にもとをそ侍くなれんなとうめくも世給へり
れまへ入らん後ので　源氏の君まて出給ふに時惟光未被召て
種中なり
女の陳　中宮は女の御所は玄輝門の方也
四位少将右中弁　右大臣息也
何のれ　退出るを
婚君かりのか　上は詞には深くとなりめ知給ひつとまる
うちとけのひ出したまふなり
桜乃三重かさね　檜扇の両端三枚深くを深くめりくく
のうそやう面白く裏をとりをりや

あれかこれは萬まくあくなくとりくさるまゝ
枕双紙にも三室のさね又室とあり
めなれされと古乃摘とも見つりしう摘なし くろとふ
やんのひけるひ也
よふきゝぬ事 源氏物語の事乃透逸といへり
無名は信正筆
五月の月みゆく衆也と称て乃野守か鏡を学へ するとける
此事也と見て後給へり 事とも詞とも見なるへし
後漢 源氏見けるん事よくえと以へつ殊に此寒勝
て勢寄事となり
れとあの浮とし へ それまて 双紙なるへし

逢の此也 嵯峨也 源氏てハの内も出給ふへと恨給ふなり
あさくら まさくらて也
やりうらふめくる夜そ 秦川律 濃州也
めえ源のせて此歌はしも枕やりうらふめくる夜そなく
てたやかくるつまおやさくらは千代まして見るへしも
志のしあへるをやりえの市かし皇女のひかりん
れやさくらかも不及さて座けるふぬ秋乃るえと
をかりえり引給ふなり
一日此 花宴也
めいかうの清代四たひ とて久し きと可尽海
陽成 光孝 宇多 醍醐 河泉及之

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

久しきものまやうさく　かめなる詞也　新ら浮詞なりや
むかしやうとて可見　遺迹の二字をもし　形迹よめり
人の手ならひまひし二條をとり入て　さらむえせのあなた
座なりすむ花
みちくれ　源氏上手と法かかののまりなとあるまけに
ゆへとりふおもしろ花
ねきなをそげにく　ほとんど也　別勅一かの御衝座也
そうなる　なしとよむ　新　カタカニシキトヨム
うしむむ花　物中も出仕へぬ猶乃中なりしまあなた
と有けしなるとや
よ後つ此事　柳花苑とかめ給へる左大臣方乃旅なるを

あふひ　後代
まして此りゆく春に　ましてた大臣の舞給をまし
ましへたちせの面目なるへしとおほやけの御まつり
ましての花になり
弁の中ね　左大臣　或中将弁とあり麦人なりしや
玄宗に　卯月に勝月荻条給ふつゑとなり
弓のけち　踏哥の後宴也　一勘非違宴事に
荻花乃可かまは宴とをなして如此云なりしや
ほかの花すん　伊勢
尽ちへもまた山里乃梅花かの花すん後ろさうのまし
伊勢山のさむける荻ありぬる雲の浮ておりひのかりし日

もなし　定家　後乃方のましとやしへるをもつて
おなしき擬宮(キメウ)めく　弘徽殿(コウキデン)乃腹乃女宮達乃そきさとなん大臣
宮たちの御もき
まそある花
桜乃意乃花―　此ところをする事となり
然共大方なるを源氏とまうさせもとむ思て可憐の
私く花も早下する理をさむや　世上乃花のみくらつ
らぬと早下すや但二本計とまうさ也花乃たくひなれむ
まて可憐くりしや只二本なるゆへとなり
志らぬかなるやとまらちせ　なげ乃事ふ我の意乃花
をかめるやうる所をとらさせむとしますや事とん

の本へ　古事故実(コシツ)をへて又まや源氏と賞翫(シヤウクワン)しつるれなや
女みこたち　源氏は連枝(レンシ)乃女宮達也なんてのさ海まんと
はしと源ふとしへ源ふ詞乃しやなげと源と付中より
らねやくつまるまは騒(ナウサ)めく侍まる心の
御よそひ　粽　嘩
櫻乃唐の綺　内くしの唐の綺(キ)ハ面白(テ)きうしろ乃きれ襴
芳のうしろと付(ル)也　桜花色ふ委
しりいとおかくひきそ　しりとも裾(キヨ)也　衣乃すそをとなり
西宮抄云　上臈(ラウハ)若直衣(ナヲシ)下ニ着下襲(カサネヲ)随(テ)便ニ不着(ト)之事ニ云々
今案袍下ニ襲をうさめるを布袴(ホウコ)と云上下用之事也
表衣布袴時依(テ)人事　先帯ハ丸鞆(トモカハノ)皮帯共云く晴(ハレノ)時そ

白蒔絵野太刀ヲさゝ花　聖太刀総指子にの無地布袴
大方人きる事不叶なりや
うへのきぬ　常の袍事なり
なされたる大君すかた　親王の姿のやうやと云よや又
いふ直衣姿と云大人の姿とさためたる詞なるへし　嘩
袍掲要越して裾をひきそよの体は其事なりや直衣に
裾をひくれ事たとけるにとや
女一宮　あれてんの女房の法服なり
ときうしともあるやさし
袖になを　随身の時此出しきぬそのあとくしとゆう
めしたるをとよろしかへすおりひ給ひる

袖にとりえ鉢の下より女房のきぬの袖出したなり
今の世にも大饗なとの時の儀式の時を出しきぬあり
又車よりも袖をおちのや袖にをとかちやくとまされ
とふさりしりすゐひ給ふへし
かしこくれ　義なもや
かけ中もかくさせ
咲花の下に遊ぶ人は惜　三位しよまそろ叔の法師とも　伊勢物語ニ
二条の花とく忠仁公にはしそや　叔の花にかけた
新縁経なりや
引きよりても　引ちをたる様なるへし
よのしぬ人に　源と女一女三姉妹にてましますなるへし

いやしき人こそゆゑよしとする擲打事也
きふさくゆゑ　冬夏寒にもあり何のそとあるほどに
我殊勝となり
さしもあるまじき事　勝月うしむせとまるましきかとし思
召なりしまを
わかきをとしまて　扇乃主志らんためなるを
石川乃こま人におひをとられてからきくいするを
うちかへて扇をとられてからきめを見ると云かへ給ふを　扇の主そやうそ可笑得や
石河催馬楽也　高麗人は石川に住宅志よするとて見へし
帯とけ　石川　を引かへてのむなり
あやしくもさまを　謂を不知人ハ源の綴を取りひていふ人也

とねぐ
あつさ弓　此結縁あり　ほのみし月そかゝる後の
事也　何故とあやしふも思ひまどふ也年あるかや
心いるかたと云　源氏云の海とふの歌人何となき事の成
色しむかりしつまとけしとるや女目色あれそ宮
いるかたを返し面白きとなり
心とうれしき知のうち　花相遠　心ありうれし他也うち
女此心ありへ文なりあれきや　名す源乃婚也　君あひたる
を嬉しかれともとも云給しける詞なる也し
源氏一部も此あるを艶に見出
俊成卿　芸歌よみを見ぬは遺恨事　艶勝の上に

よはひ　藤壺にとしく人の様ならはかに故也
御方の多んしく　ときもそふにや
此詞より源氏を大将に任し給ふなるへし　一ノ巻ニ
卅九　大将より三位中将宰相にならせ給ひて大将
かきませ給ふ宰相の大将と申しさするいとめてたく
いはけなかりし
同四月三日遷二大将一　後二条関白師通記保四三女七任二参議一
顕職とて推挙せられしとく
一さ職也
むくひよや　南白書かきり藤壺女御乃御事なるへし
人のやう　桐壺院を云給ふに御ゆへ藤氏ならひ給ひ
子すといふり

今さらに　弘徽殿女御にほ給ふにとはこそ
朱雀院の御位に付せ給ふへき皇太后なるへし　花宴
にたれ婦人まて　弘徽殿を内にもまさに藤壺を人安
うひ給ひし御しそて御推乃ことや
春宮をそ　手風冷泉事と書かきり　立坊ハ　受禅の
後乃事なるへし　冷泉を春宮と申事実なりけ
めてみしらせ
大将に参よ　大将と云事此巻より初ぬ参議より宰相
まて兼職也　源氏参議の大将なる也し
海とやらの　紀者の詞也古今及事の様子に書り
前坊　立坊かりし位に付給ふ給はぬとやきりそけた

れさせて位を御譲(ツキ)なさるべき摂政ありなくまう
せ給ひしなり

斎宮の　秋好(コノム)のる　后に立し御母君は六条の御息所也斎宮を
院代にて下りたまひのりうせ給ふと云々朱雀院御位に給ひせ
給ひて斎宮は卜定(ボクヂヤウ)ありしかどもみまかりし其巻より一年さ
きの年定(リ)まりしに卜定ありて三年めにくだり給ふ人は
ありや斎宮秋好院を天子の一期(ゴ)也斎宮を御一代一度の
ことなり　河海

古文　桐壺乃御方　前坊也
あのみくしげ　桐壺乃御養子(ヤウシ)なりし
なりしぬめの　殿へ密通(ミツツウ)のまとなり

女もおけるは　御息所(ミヤスドコロ)は廿九才　源氏廿一也
かれはさてうらみたまふ　源氏心とりみちの御息所のけ
しきに隠(ミスヤ)ふ指して嫉妬くらぬとやとも所ハうらめ
しきものひ給ふなり
槿(アサガホ)の姫君を　桃園(モモゾノ)式部卿の御女槿の名を常に参りし人は
語つたへしよりあらぬへし御けしきおひのぼりして又うした
なくも有へきなり
あまつまほしくもぬ　源氏好文を御用葵方(アフヒ)へもやらせ恨(ウラミ)也
ひくるしきの御乃　葵上嫉妬(ネイシ)也
ともし折ほのうらし　御息所へかよひ
斎宮秋院も　語ともなし

女三宮 弘徽殿乃御腹のみこ元服ありしはきのふの事なる

しなれるへし

すかうしかも 斎院より成たまへるさいゐんなり

めつらしきことなり 供奉の人数さたまる上下よりとる事も

御禊の日上達部 斎院御禊の事先ト定ありて東河にて

御禊ありてしはらくありて初斎院へ入給ふ斎院とは大内の内

膳職か左近府なとを点して借にかまへられる 三年

潔斎の事あり其年の四月に御社へまいり給ふとて

祭のまへの吉日を撰て御禊の事あり則紫野の宮

に入給ふそれを二度のみそきへと云今案三度の御禊も野

宮へ入給ふて後二度めの禊なりける初度の禊

すへて勅使参議一人供奉の二ところの御禊すへて大納言を参議

以下あまた供奉延喜式おほみえしをさ部両十二人の

勅使ととりさためたる人の中に源氏大将をも参議二人の中

にたてかへし初度の御事なれはよみしきれ花やかにと

御方大将ありすなはちなり 時

ト定 うらなひの宮 大嘗会なとの始そへ しゆきう

たとへはきさ方国郡ト定ありと云名目ありお掛る委

下りさせ給の各 御禊乃日の勅使ひつゝを深装束を着る

また唐鞍ハ倭ニ用香象なとかうやくみれは房蔵のみるは

もしかたちの荷なく似せつゝ先染装束とてひくれ

茶すへし

大殿の君　偶邂逅也　花河委し
よろしきなる結構をほくせさせるるや
ほかの人　葉嬢姫なり
おほかる人　天下の人共と云心也
大宮　葵上の御母
ゆるりとめぐらし　車立所あまたありける
よそほしう　歴々也
にようばうぐるま　いうく　雑々
あじろ　凡車を唐庇檳榔庇毛車すべて檳榔と云ふ
くや尼眉車葉細代木車をも網代とも云ふ今の御息所
此網代ハ網代と定めし　但尼眉の車青濃下簾
そとかく網代車にて下簾をかけすへし人も女房乃乗用
一すべて八葉乃車中もかきされをとりく事に候はは、
いられまくも相違なるへし
一さもしうされさるそちとおひさるるを云也　花
のきさま　行粧　童女のまゐる猫也
さかりそしせう　下人ともの詞なり、
ほどの思ひて　もやみて御息所の衣丈ね役をしらう
けとみてなり
かうけ　豪家
そのくさの　御息所の御後のことまでとりや云人の紀ら
色あまき若をや何かと今更われといひるんやうもなきなり也

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

人たまへ　人給　出車と云ハ方より點をされてある人は
給ふ故なる物也　さしおくべきにもやうまさるといふなん
用ゐむなしき車を用意して置をとなへり
榻車一挺　女車に榻を用ゆ上下のやまうしなんた
め也又相りの不限しやう末代様なる御相なるべし
まく給ふる御車のどよ　不思議なるを云也
牛放されたる車のとうへのけしきよ　人不寄車なとめ
御かしこきなるべし
とをらいでん　御給へる方成べし　書様好也
ことわりぬ許事ある御なり
行くの御ハ　古今計集　さてのく風情のくさ給

一　御猶とかくさわしきの色新をとさふみん　御息所の
方をとこやまと給をしさもなれをと新枝たふみんとも於猶
一　さぬまやとむりひなしてむつくし行する　源氏乃何
となくこやまと給ふ事もとしまや
大殿のを　葵上と源氏給ふまや　御息所のしおさ
星さるる也　葵上ハ車おそく出れ来あ御へし
新をと乃こ方　源をも見給へとも源ハ忘れさまをとよめり
見さらし川　加茂山より出く
立せしとみさらし川よそしみろき
めもあやなる　うつもしき猶の文成べし　後拾遺方
紅葉をく錦とこ南と守しのとめもあやにしも今朝

さすかにめれ　是をあやまるにむかしをわすへし
大ねのかうり乃随身　のるによめぬ儀也
近衛の将監曹府生一人なるにめしつかふとそいふ
まくと云　一員にもの子の随身にもいへり皆帯刀なるを
堂上のを随身につれられぬ事例なきとなり
此猶弱冠と可見也源氏大ねと結構よからめんため也
第一難儀とい　光人の瑞の裝乃兄弟なり
まよ末もすひのねを　論語君子之徳風小人之徳草々上之風必偃
偃列在風行如藨草靡　文選
つやゝかなる　小袖をとぬかさなるを
市女笠きぬとさてゆひたるをいへり　河

すけみて　歯ならびすこしもちらすや
かくきこえめたる　なかさよくなまくなき
笠なとききこえめたるなり
てを洗ふにそ　手扱合てかのむ中也
司る指女　花ゝ綾也不及其儀なる
なく濃　是又一指の見物と云りさし渡くせ也
多のかた　掻練の文まつり
神ならめとも　紅葉なとあいてんかく縁ひしとさせむ
かゝるにて源氏もおめて何やうくを見あり
姫君を年比　掻練のむ中にけしわきくる跡に源の冷む中
又めてたさと大方なるにとも此跡くゝるなしとかき靡

こすへまで又けちめくとも思召さぬと奏すらむなり
きのふ此日ハ　前日を申日共の御禊乃是猶也
かたうとをりふに　左大臣殿の家風をひく人ゝ多き
承くる趣と思召さぬ葵の紹心中を隠ひて下くもを
しけちうるとや　葵ノ御自然ハ定りぬる事たんとを
御用しめさしとなるさし
斉宮のまゝ　卜定ありて大内司に入給ふへき事障事
ありて偽さりとの六条京極之宮におはしますなり
桃乃あくゝのまはにしと侍るて　神るすふしとつぎて對面
すさまや　天香具山の坂木をとりて天照太神此岩戸乃前
まく祈給ひしより乃ゑ也かゝるの榊字を神眼木と書之

賢木巻
そゝくしうゝて　六条葵上との中就へし
うきかきん乃うへ此禊　童女を騰乃時を御禊上りよ表禊と
きゐつまきさんハ靏霰散地也そのほか又上禊をもをさす御禊
いそ抜刃の禊の御すら禊る御へし
はつわうまかす　海辺とりつまうれなり
うつか十一云　うちのうつくしきまうりを御と仰付た
御やうなりとなり
子ひろとも云　みち思は塩のとを源乃心不定とよめり
葵上御おとかけひうる心也　呼
むまとれもとし　乙殿居し　次々云心也　甲し心也

右近乃馬場にありひをりの日の騎射の時中少将懸座する所
といへり殿上人内の時をかの隙もて一条を東へ
ゆき紙屋川よて右近の馬場をわたるなり　車立とて車
立所ある所也
けふきの床さと　源内侍　檜扇の端をおりてかけや哉と
持けるの
はかなしや哉　葵を逢と云心ありてかへあふひとさあま
神のゆるし我待ちけるはきのふの使を待もとなかりつ
されどもひなしよめり
さあゝのうち　引哥なり　只逢ふ日と云心也
源氏小宮あまたはむなしきを云詞と可心得也

かざしける哉　後撰集　賀茂祭の日摘見侍ける
女の車よりいひ入て侍ける　読人不知
ゆきかへる八十氏人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を
悔し
ゆふたすきかけてもいふかなさ人のあふひてふ名を
源枝にそせし
八十氏人とは天下の人をさしていふと也　源内侍身上を読
あひ人多あふひとよまん事なれは古今摘花子葵と筆
日とたのめる葵とよむ理なりしや
悔しくも哉　文内侍　葵を人たのめなる草乃名とな也
人とあひ　業平物語　弾正宮和泉式部と日とて車より

祭見所式部の方の簾(スダレ)おろして紫乃錦(ニシキ)の袖忌をと付たるも
今案みの簾あるさま成事しられ侍りし几下の
帷(カタビラ)とかくるようにてうるしのうされぬまや　源氏とせ
上人みんとのふりり簾をとふかめあ詞をねたむやまゝく
たゝふるとなり
いとまくらぬ　めしそふむ也あひてにゆりてこそと
おほしめすを源氏の御中なる事し
如斯うに　あひ乗(ノリ)たる人のある車へ　やうとのけなとまで
それを通つよき人といへり　揶揄(ヤユ)の人わゆへ世上人を嫌(キラ)ひ
わさ也　作らずしかれど　溷(ミヅ)てよむへし　乗る(ノル)はらおく哉
如何様にも可付之

釣する蜑乃　伊勢乃海に釣する蜑のうけなれやむそと
けしと定て此句は　此一首までつゝきたるやうに書たる
へし　こゝろはやきれまし又人まらへにと御心ひとつ
と定て心にたゆたふるらむいふうかひきるなり
おなしぬ身をと　源氏の云へ御息信(インシン)の詞也
御使何某　御使乃車あまたひの日此事ある御事し
御をのへと　此巻のはし葵上へを好色(カウシヨク)なるやうくとお
記やうの思へを御をのへと御懐妊(クワイニン)の人あまたを源氏
二ところとや
いきすだま　遊仙窟　窮鬼(イキスダマ)故調(ニテナヤマス)人(ヲ)
注曰魂与(ト)鬼通(ル)といふ也　人の霊魂と神と合てある(?)と云

只此是也　霊はかりまくもなり
人中もゆかれ　御息所(ミヤストコロ)の此是也
二条の君　世にはさはひを不気にしてはへり
親の御方　大臣殿乃御親の方へ也
院より　桐壺帝(ノミカト)
うの殿まへ　権門(ケンモン)を仕まほしと不言指也　恨を不顧(カヘリミ)事
大事なりくるし
かく我御物思ひ乃みされ　御息所　耳事敬分へ御出
まて御済流(ニニュウホウ)也
あやにくなり　葵上乃事をのたまふなり
うちとけぬ物から也　御息所より御たまふ也

思はりの色さま　伊勢下向之事也　六此心中成へし
いとほし　葵の御嫁妬(ウハナリ)のことなり
逢つれ　此御方乃心也
袖ぬるるこひちと　御息所此御哥　源氏指逸才一透逸(シツイツ)
乃哥也　深(フカキ)ひちと云ハよそよりも思ふ時因子を
思ふより川中へ入るなるへし
山の井此哥　さし浅きといはん用也　悔しきそ汲初て
尤あさくれをは袖乃ぬるらむ山乃井の水
源氏心をはして中此契り浅き理なるへし
いつのかやもつつ　源乃御心をおもひ定めん方もなき
と思召すよし　諸人の事くをといへり

袖のみぬるゝやいかに　句　ふかゝらぬ山の井かり寄(ヨセ)
よき詞なり
あさミにや人は　源の御返事　田子ハ泥(ヒヂ)ニおりたつ河也
身もそほつまて深き事ニ成(ナシ)て　山田の溜(リウ)をもそへたり
河も溝(コモ)ル贓(ゾウ)善(タタ)第一とあり　心詞無比(ヒ)類(ル)　伊勢物語
つれ〳〵なかめに　浅ミにや袖を　哢
おほろけ　大方ならぬさりとてさりとてつゝみて御
過るまじとなり
御いきすたま　六條御息所乃霊気又御息所乃父大臣の
おとゝ云疑(ウタカタ)あり　河ニ葵上乃父のことゝ云々　如何
栄花物語第十二ニ御関白霊気ニ似たる事あり

おほしみたるゝれを　御息の御心中なり
御夢なとに　いきすたま夢よ念と称とのもり合といふとも云
うち拘(ハイハク)なり
とかく　いの気　ひとふれいのまゝをいのるむ気
身をすてゝ也　身をすてゝいふやうにあんなりに　よりかゝる
我摘をむるなり　禍恒
いとおなくさう　うかれたきむなとしうすゝとも云
むかりめの立るすなり
つまなき人　源へ也　吴本可用也
ともふも捕を　おもりしと思ふも捕をおりふ也おもはし
ともふさはしやすう　奥入　面白き書様かりや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

猶ひかとせるをこの色乃つま　此前ニ云通して下の色
乃たきをむすめとの人まゐの出めるとむすめ通ス文を
とや　むすめひめとめとやすめ方への色せさとかや
猶ゆゝしも日なりけるをし
みちの事　産（サン）以後此するあるへし
猶の心ほかに　夕霧を云也
うかゝしなひ　古注　接（ウブヤシナヒ）
夜毎　三ケ夜　五ケ夜　有礼義也
古注正義曰接謂食其母使補虚強気也
猶ゆする　浴（ヨク）　髪あらふなり　ゆする水を夜とりうへ
とや　古文ニ云　史記　沐（ボク）ゆする

涙うなともすゝきりのの　邪気（ジャキ）形（タウ）之時護摩（ゴマ）芥子（ケシヲ）焼事
あかるゝ香（カ）避（サルト）邪気云こ
猶心ゆかるとも　涙息此は心気
人の猶ため　源氏の此あかるなり
我いとおやまし　葵上の詞也
またのれさ返まく　本姓（ホンジャウ）不成ゆへも源へ無対面（タイメン）なり
ことあひさる　左大臣の事　さうひたれ時かゝるれも
盈（ミテル）とかく理まて葵上通（ケウニ）出来さるをし　此物語そ
いかくもはさあるへし
内なや　源詞
まきあし　葵へ対面（タイメン）アリシ年度となり

けふさへ一色なり　母宮の心なるべし

あかぬ事　年来何事を隔（ヘダテ）つらんとなり

宮仕つし　葵上乃母宮也

れまし雨となりぬる句

あはれなりし　大宮の御さまを女人乃撰なりめでたく

へとなり

涙よりも先とくめて　葵上の源をも又見給ふましき先

表なりや

秋の涙さめし　八月　まもや県召（アガタメシ）　秋をつのさめしと

云のゆゑ也司（ツカサ）ハ京官（キヤウクハン）県を諸国を任（ニン）を

無益　左大臣の無益也これを諸家の人みちるなるべし

いくりなきのちむ　暴夜（セウエン）をも也　学所（イタハリノツム）

ゆきなき　動　又響　日本紀

摘みそめられ　人又挂（ハジ）かせなりなき

涙抵なく　死人を抵我のよみ事あり

ふくなつかぬ　亡人乃方よりの音信（インシン）を祝着（シウチヤク）なりお思し

めさぬなり

馬追野し　死去を十四日　女日色か

もこらふ　呉本　海らふ事とあり　同じ心か

文選第十二郭璞（クハクハク）江賦（カフ）に神（シン）蜃（ルイ）蝹（ウン）蜦（クン）以（テウ）洽（カヒヤウ）注に云神（シン）蜃（ルイ）ハ蛇（ヤ）

なき　くちなはのありく躰也　蝹蜦を　切良也

よくよひあつくき躰か　日本紀第二豊（トヨ）玉姫（タマヒメ）化（ナリ）為（テ）八尋（ヤヒロ）

大熊鱷葡萄透蛇とく服すそえふ術ありしくともふ
あくろなり
いとえもろうされかつらを　逢骨
人ひとつの　独乃ことなろすと也　夕顔ともる給ふし
八月廿日あまり　打とけて云なる時ふそろしや
若上ハ別給ひし時此秋九月と思ひ出し給ひしなり
わかるゝ秋　源擢称
我先立ましまし　まへの服ハ妻の服よりも猶濃なるハ父の
令云夫若准ニ父母服廿日服一年嫡子土なりと云く
一等也妻ハ二等也　経室句論
限あるきも事　今の定なく深まく思ひつの事の紀也と云也

法界三昧　普賢ハ法界あらゆる所作を三昧とを観ずる也
慈悲を三昧に住し給ふのおとし大士菩薩也三十七尊衆
合力普賢延命大願薩埵普賢を廻向をとりて住せ給ふ也
此文何に見えとも不見三昧梵語翻訳の定字取法界普根
定給ふむの
あまく　引言後撰　為忠のめけと　むまひ盈致兄子
たふなろときそ任ろ思ふ比叢を汗ます
又たくひ　法一女子也
袖乃上比盈　此文不ふぬと切なるむる給へし
撃掌上之珠擢心中之冊　伊勢尺
さ忍りのつのまふ　八月まて入給今の廿比くさなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

猪熊本ニハ臨本あり

いりくしき　厳重(ゴンチウ)の潔斎(ケツサイ)也

うしやすく思ひたえにし世も　源氏夕霧をかねていへることゝ也

時しもあまた秋やたれにもの哀へ及ぶをとみのなかまし

き抱きと　引哥下句相違

念仏は懺法　常行三昧　引哥阿弥陀経

男子も心をくけるなれ　吹まよふ男女も心みまる秋風を

冬の比抱きとおりひけるなれ

男子きく秋の小夜風吹あへ人にかはし人乃心にみえ

法々　哢　を合て也　不及引哥乎

筆比迄しまさしゆる　引けさしなる沙汰ありや

あはれおほかる御法の紙　説偈は法華の文なるべし

般若の事也紙の文也　華も同文なるや

さしとゞきて　ミやも尋ねる也　時分のうちおきてゆく思ひ

て見給ひといひもさむなり　哢

めでしぬ雅そ　文詞懸斉時分となる也　哢

人の歎きといふつゝさのまさるやうなれをめでしぬとや

荒涼浅用之なり

人の世をしらず　菊のしたくと寄なる也

なんとあはれとも文乃詞ともなんとあはれとなり

つれなの浜竹やさそのりとなる也

久しきおもひ立つゝひ　般若より精進へとや

みつされの　紫れくろこゝろなりけるし
こよなく　文詞　般若の心中にそなり
とまうち心をくらんとを法恩寺乃摂氣に成し
をりのめのし給ふすゝ　うへをとまうちもとゝぬも
むなしく成となり
うへを　悉皆（シツカイ）　教訓（ケウクン）也
浄らんせさせもやとて　其中也般若乃方よりの文なれ
と浄らんをぬ事もやとて此文中も思ふ心をと書けくさ
ぬ由也　こつある詞ある御覧し　哢
法内外の経（ヌレ）にも也披露（ヒロウ）と心得すへしとやと
まうと続て其法もこすへき中も也おなじ中も初ぶりの

かくしぬ福と云心かや書一人心かくしく
叟よ　さて并の時分のまた般若（ニヤ）比文浄らんとなり
むの死のし給ふと心乃鬼（シニ）かや
こゝん坊　桐壺（キリツボ）と法兄弟（キヤウダイ）　斉宮（サイクウ）法めいすゝ
そのあはりこ　先坊（センハウ）のはりこよ法息所も桐壺帝（ミカド）の内
こりおもしまさそんとなり
大かくこれ世かり法者て　法息所名仁（メイジン）となり
野の宮比法かうつろひ　諸司（シヨシ）より野乃宮ゑ入給事なる
へし二年めの八月也
同日　やうにち　四十九日まで籠（コモリ）給ふなりけ法事
はりあふるへし

三位中将　此中将今の詞よりみえて侍

すのこさらひのさやのあはれさり　句　秋のこゝろなと

いふこゝろ九月は此中源氏を藤袴まくはらんしあるを

しのひし時文抹か隠（ヒタイノ）よりれぬるに藤いとなさけ

あるなかれたるふれし時の心は此後に別なれと歎也

物のゆへし

まそくを　不可然　世中をかくいひく

のまことくさつゝのやゝのかなしんとせん

時雨ちして　前後也　非其日　十月小雨てなり

中ねもかひ父乃かさし　姉妹の服三月服女見ゆ

鈍色衣ニ年縮色練ニ裏表ハ生絹裏揚裏を衣ノ同鈍

父服なれて深やうすゝつくを十月まての時は父服ち

すくなきなり

あとるを　劉禹錫婦ニ別レテ居タルニ夢得作テ送詩之

相逢相失両如夢　為雨為雲今不知　女郎魂逐暮雲帰

鄂渚濛々煙雨微　只應長在漢陽渡　化作鴛鴦一隻飛

宋玉高唐賦注曰帝之季女名瑤姫未行而亡封于巫山

臺所謂巫山之女高唐之姫旦為朝雲暮為行雨朝々

暮々陽臺之下　巫山高唐陽臺も同所也

ひもはつりを　孔衆也　直衣のひもはつりをさし給

ゐるなりあし　花もいのし

あま述八をあし　軽服三月の文字も知らぬ由見濃けるそ

忘れ浅深(せんしん)はうすき事へ也 呼
紀れ浅深といふ事 粗服は紀の絹(キヌ)也 用(ル)事例あり
長保三年二月一日定子(サタコ)皇后(クハウコ)浅喪(モ)の御葬関(ノ)白純(ヒタ)火(イロ)色
下襲(シタガサネ)を黒(チヤウ)し給ふよしみえたり
政事(セイジ)要略(ヨウリヤク)に子細注(シル)せり
無となり 此巾
ひとゝせの 此妹(イモウト)乃事なれともある也
みし人の秋 無とし滅すれは八月やのそ時無といふ
成るとや 結句(ケツク)に余(ヨ)情(セイ)可有
ほのかなる 此心中 大宮もしられさるなり
見いしもとかうは 苦痛(クルシイタミ)也

枯れたる下草 此家(イヘ)は勝(セツ)く
なき枯の方 源大宮へ乃事也 夕霧を子の養育あるを枯(レ)にて
しめさしとなれあし 小君ふおてこそまさ
れらんこそ海ありける乃心含(フク)めり
木の葉ちりけに 後成此詞をとれる 嵐烈く吹乃末に
緊此日なそへてと強く成りあの涙なれ
いつをみて中くの 頃お思(アニ)ひし八葵の事也
さし海と紙けまて 源より接(アチキ)へ又着信(クワトウシ)をく書かれせ
定てさやうの摘と成るる御目ありの事なるとある也
その摘と云心も 河二世恵られとも見ゆ くるる付た
まはる此やうの文なるんとの方を見す御目ありおさる

とよや　呼者と図みしむいかく　連々(レンレン)好色(カウショク)文ものよ

ひとし中也　無官の大夫也　一人子(ミコ)姫もみなられ共とすや

更乃文しける　純色(ニヒイロ)唐紙(カラカミ)

ほきてこれを　攞りつけて也つれなう御座あなけれ

御となりなし

つゐも時雨　秋冬月つれは時雨をかりしのしかく袍

ひたるおつきえなりるとき

おほうら山と　右大臣直廬(ヂキロ)中へまかると云々

亭子院(テイジ)仁和寺代大内山といふ所ありおそしまして時常

中納言兼輔(カネスケ)勅使(チヨクシ)まかく参りて　なら雲乃九重ふかり

歌なるは大内山といふなをあつまる　と讀しと思

ひて今源氏の御ありひしを籠(コモリ)おそしますりうそなて

乃給へれなり　呼

もやハとて　名あらそうつろいりも深てましなふむと

思ひやを见せける　むそ思ふ袍をもし见せぬと云むし

秋者なり方　をくまぬ果也　むそぬ也

何るりにつきても　大方の事をおりひ給ふなり

山の御息所(ミヤスドコロ)をくれ給へれも又なふ雨をを下るおりなし

哥詞の余なし

つらさ人〳〵を　攞(アサ)又藤壺(フヂツボ)をおりひ給ふる源氏のつらさ

人也をくれなる上をこそやかそうや　引歌未及

野ゆへ給ふ　御息所のたくひなり

ゆゑおほし　風流なる人のかくしやするを
みぬほと　哀なる実事もなく物をしるまほしく此事
なかるへし　めかやかたらふれとも又とをぬかし
隔もなれ事しむ安となり
中納言君　紫上女房也
これ遠くて　これ遠来の人みなれそなれ離迷ひそ
しらうんしや思しらうしや
此方のむねそかなり
家もやしをも　あくれりう源也
いのちより　余にふむちり如君ふ猫なうし行の別のあり
行かうまし　哢

火をとうちけちめ　此詞めく紫也
とわすれて　あてやかさ　紫上姫ひんなり思召なり
雅なる人にあ　そよしらうあなめ　女童のまろ猫也
くまはう　菱草文を相子と大略同之
むすしを　源経也
御らとを　源氏かくて行する移なるとんとするを
をあしきまなはう　此時乃さ海お懐へし　四十九日が
もちて女歎の隠あはれなりけるに　哢　今源氏の表出
御ふ相御代給いかにく浅承らん書撰がる也
きふかしも　なふす限らしと大おほし先するを
をとくれ　末の寄りく此寄や世中乃あくまたそれたため

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

流なり御乃中にあるへし
文に侍らんせ　大臣の左府のみをさす人にて
いふかひなき　葵上の事をさしていふとなり
かくむまれさす　みゆるなる　葵上の事といふ也
ねとかくしき　女房中上臈也
殿はれはれし　左大臣の詞乃やうなりお伴し給ましき
人もとまり給へき　たゝ乃給ひける事をいへくいふや
又源氏はわさとの人とて見捨まし人くなるをいふ也
思ふまや　河も嘩
中文　藤壺
ありし世を　源氏也詞

めつらしく　葵上の事
きえまてもとそて　此詞幽玄也なりつゝあるあまと云ひとこと
めつらし　嘩
むらさきのうへの給はれ　冬文の袍也夏ハ縠　冬ハ平絹
又有紫乃袍のことし一向云無文冠を指如何
一位常の袍をは文は羅也服者ハ無文羅用也　冠も其
又巻纓服者乃冠なる物也常はよく羅綾をも付する也
あいまし　巻纓
いなと　葵上女房詞　ねなきつふらなる
御侍らはく　服衣その色給ひしつゝや
衣の色　十月更衣なる色也

忍ひことあらて　二条院は内裏の對なとる所へしうら
やすこかなりし給ふなりや
共あやしう思ひきこゆ　紫上本意と成給らんとおもひ也
とも又いふしなり
中將君とりふ後見なし東の對にまくさは是非するせ給ふ也
ほりの君　夕霧の君のをもりハ大宮のもとにある也
ふけなりうね　紫十四才
色んぬる文字のへんと何れ字と云あけれなり
れるしけなきる　れさなれ顔の若や思ひのこく成て
とも気らく思ひのこく成て　白　忠しきそこそさる
なるむもとりへ里　也くるしけれとも紫の心中ふ

とおくるしきれとかくとかく何事ら来して双也
君さ　源氏の方へなり
御硯　御文を硯にさし入給ふを生事あまたの心成へし
あやなくも方　御ちまうれと云心なり
まんくふれしを何とて隔たまふそとある也
うらなく　親とも源をたのみ給ひしうとや　紫心なり
ねの子れりらい　十月亥日猪餅食之令人無病　亥子
七種餅粉　大豆　小豆　大角豆　胡麻　栗　柿　糖
めつらしき思ひの　紫　紐結するもとしくものらぬとや
うとく　亥子餅を夜こ三日乃夜れを一夜なり
きふさりけなくしれ　歯度の儀きらけし不の給成へし

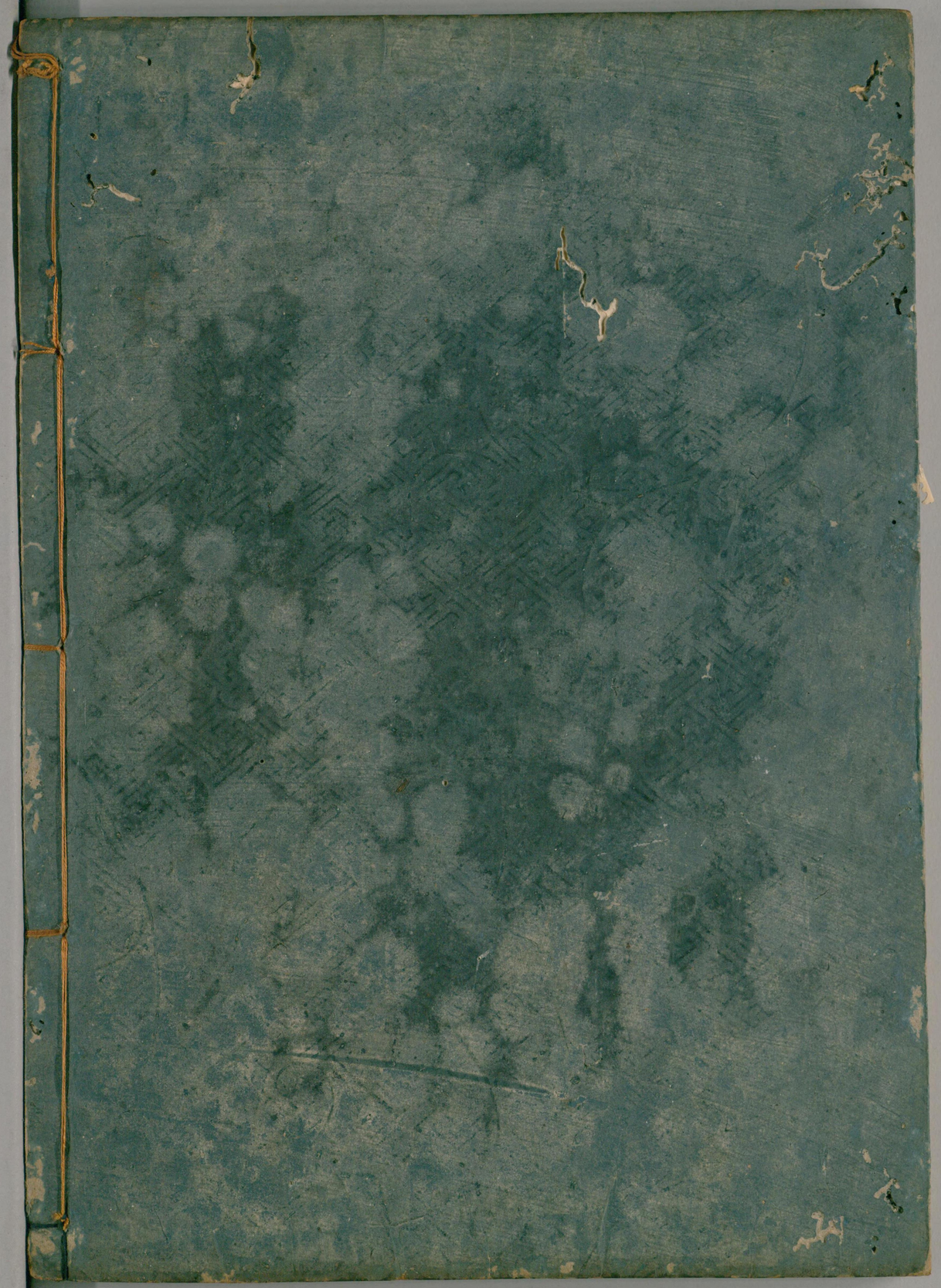
子は後にいはん　亥子の翌日〔ヨクジツ〕乃事なり亥の子はかくいふ人の
おさだまらずこ源乃詞にこのなくてぬ程に惟光め紀向るを
ミつの一なくを　三元一つまでわし讒説〔ヨムセツ〕ありとなく
此後三ケ大事の一也　呼
祝は後を世ぞいひける也世の字を乃きて三の一とよむや
諸説三をいとあり嫁娶〔カシユ〕乃三日に餅を餅枕うらにふさく
事をたよりなきぬ事也人は死〔シ〕する時世俗〔セゾク〕にも餅を
供する事なる枕机〔マクラヅクヱ〕といふ人あられども さるまや
たとへを女の男のもとへよめ入して又二度父母の家
に帰らまじきためを偕老同穴〔カイラウドウケツ〕の契と名付ていはくと
云文字も帰乃文字を用ゆる也女は夫〔ヲツト〕乃家を我家と思
へる由也　餅〔モチ〕を用れも決は男のもとをまてかへ
さるしも也　嫁娶〔カシユ〕日　白〔キイ〕む裳〔シヤウ〕抄を用れも此故なり
あくるあした　むつかしは此云
むすめの年　少納言かむすめなり
かうあのきこ　香〔カウ〕をへ箱〔ハコ〕也　決ず委し
あなのしこはくさくしなきいくつも人ろうしよもあと
いふあいろなり
あくる御事そ　ゆるさしとなり　一日侍也
いつをさされなし　はくなると云字いめとそりや
いまえされ文字いまを活へよきまし里侍らしまて
惟光詞なるを

まろ道のみ哉　源の祝言乃式をしへ給ふらんとなり
ちきりし文　ちかくいのりきつる人也
あらく　花足臺を箱に申へ入るなり
さしもあらくに　少納言よ先ほどよりし　惟光いかにと
たのみなり
秋とや　若草の新手枕をまだしらめて秋とや隔てんにく
うちなくに
世中乃つと　葵上故とや
いかさま所にあも　所見殿ありし朧月夜の威給ふへ載縫する
此や　大臣の女乃威識ありや
これ大将　朧と源へとなり

ゆとかくしと　恵給ふ也
君もさしなへて　源御むるを
給もさの　男の烏帽子着乃むりや
なれきまさらね　御裾する交睦の給野比する紫のうれ
いまさらて忘るまさまゝる
年ものあらぬ　源女二歳
みそのげ　椸架
礼記云　男女不同椸枷不敢懸於夫之揮揓男女同さか
かゝけぬ椸也　かゝるそいの訳そくゆのと云こ
たふはりを　面白詞や　きふもくあひもるせとさる
まへとなり

857
118

こゝろまし[illegible]おほすそれ用意(ヨウイ)無徳(トク)なりしんとや
まやさめる　源詞　引歌不審
春の初にみえ侍りしかんの心計なくも可有之哉
あまた年云　下句哀(アハレ)なりと云るを
はたとしさ哉　うへをも人此事をもて下乃あくろを
面白となり
とかのる所　大ところへぬるをもてそろ理よとや



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用